



TITLE:

唐宋變革期における江南東西路の 土地所有と土地政策：義門の成長を 手がかりに

AUTHOR(S):

佐竹, 靖彦

CITATION:

佐竹, 靖彦. 唐宋變革期における江南東西路の土地所有と土地政策：義門の成長を手がかりに. 東洋史研究 1973, 31(4): 503-536

ISSUE DATE:

1973-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/152873>

RIGHT:

唐宋變革期における

江南東西路の土地所有と土地政策

——義門の成長を手がかりに——

佐 竹 靖 彦

目 次

はじめに

一 五代宋初の義門とその分布

二 義門の形成發展とその背景

三 南唐朝の土地政策をめぐって — 潘佑と徐鉉 —

ま と め

は じ め に

この時期の江南東西路地域に關する社會經濟史的研究としては、青山定雄氏^①が江西の新興官僚層の形成について分析され、中川學氏が客戸の實態を客來戸とする立場から、江西虔州（贛州）の客家盧氏の例をあつかわれた^②。

とりわけ問題となるのは、中村治兵衛氏が南唐末潘佑の土地改革を、均産的傾向をもつ進歩的改革と考え、北宋に入つて江東地域の客戸率が著しく低い原因の一つをここに求められたのに對して、西川正夫氏が同じ潘佑の改革を「南唐朝支配層を經濟的に支える均田的農民が、その内部で階層分化をおこし、主戸佃戸制があらわれてくるのを阻止しようとする

る」反動的政策と評價されたことである。^④

その後、松井秀一氏が、この地域の農民の成長、義軍等の評價の問題と関連して西川氏を批判され、中村氏に近い見解をとられたが、割に簡単な言及に終っている。^⑤

本稿は、この地域での地主佃戸関係の成長を義門の分析を媒介として、唐代から歴史的にたどり、又それに對する南唐朝の政策をあとづけることにより、兩氏の見解を統一的にとらえようとする一つの試みである。又客戶制度の位置づけについても、そうした論旨との関連でとりあげたい。

その際、一口に江南東西といっても、それぞれ地域差があることについては、一應のイメージをいだきながらも、分析の重點とはしなかった。概していえば、南唐政權の領域になった地域の中では、杜牧の樊川文集にみるような状況や黃巢起義の終末から吳政權^⑥の成立への動きからみて、淮南が、もっとも早く政治的矛盾の結節點として登場し、ついで挫折した田頌らの動きをきっかけに、次第に政治の中心は江東に移動した。江西は政治的左遷者の配所とされるように、^⑦政治的には終始從屬的狀況におかれたが、五代の地域の開發の進行はむしろ江西を中心として進行したようにみえる。

一 五代宋初の義門とその分布

この地域の南唐期の土地所有をみてゆくと、現在みることのできる資料からする限り、問題は屯田と義門という二つにしばられる。

このことは單なる偶然ではなく、この二つの問題がこの地域の土地所有のあり方を集中的に表現していると考えられる。

ここでは、まずこの地域の義門の位置づけのために、間接的な資料として、同居大家族の時代的趨勢と宋代の義門の分布を概観したい。

この点について牧野巽氏は「近世中國宗族研究」^⑨で、同居大家族の存在が唐宋元をピークとして、明代には、宋元よりも遙かに大家族が少くなることに注意する一方、「支那家族研究」^⑩で、同族結合は中國では宋代以後むしろ強化されるといふ重要な事實を指摘された。

この一見相反する状況は、しかしむしろ相即的に把えうるであろう。記録された同居大家族は、いわゆる累世同居を基準に、義門として旌表をうけたものであり、宋代以後の同族結合、ことに范氏義莊以後のそれは、仁井田陞氏が「中國の同族又は村落の土地所有問題——宋代以後のいわゆる共同體——」（東洋文化研究所紀要10）でとかれたように、明白に、地主的な、再編成された血縁主義であった。この点については左云鵬氏が（歴史研究一九六四の五・六）、毛澤東が「湖南農民運動考察報告」で、農民をしぼる四つの系統的な權力の一つとして「族權」を指定したことにもとづいて、族的結合の宋代以降の發展を、後期封建社會の發展との連關の下でより明確に整理している。極めて單純化していえば、唐宋を劃期として、累世同居の義門から、族人が各自の經營、所有の主體となり、基本的な地主佃戸關係の維持のために血縁關係が利用された義莊へと族的結合の重點が變化したといえよう。

一方、いわば、この義門から義莊への轉換期にあたる宋代の義門の分布については、宋史卷四五六孝義列傳（以下孝義列傳と略す）、續資治通鑑長編（以下長編と略す）の義居の記録、宋會要禮六一の義居の記録、及び永樂大典卷三五二八（以下大典と略す）の義門の項の記録の四種の資料がある。このうち前三者では、ほぼ全國一様に分布がみられるが、大典の記録から、宋元時代の義門の分布をとると表Ⅰの如くなり、ここではその大部分が、江西江東の二路に集中している。この永樂大典卷三五二八は、義門の南史の部から始まり明代までの義門の資料をのせたあと孝門の項にうつっているから、資料そのものとしては欠略はない。むしろ、大典の記録が義門の實質的内容を記すことが多いことからすると、いわば政策的に全國各地で旌表したものの記録である前三者に比して、より實質的な意味をもっている可能性がある。

この點をたしかめるために、前三者のうちもつとも網羅的な宋史の記録にもどって、その中から何らかの累世同居の内

に形成されたのではなく、黄巢の起義に伴なう動亂の中で南遷した陳氏が江州長史としての崇の實力により土地所有を擴大し、その勢力の保持のため意識的に結集したことである。江州圖經はこの間の事情を次のように記している。

「(陳)崇は才識があり……江州長史となった。そこで族衆に謀っていった。我が家は代々餘慶あり、子孫は衆多で上下仲睦じい。しかしこの家運もいつかたむかないものでもない。同じ族人でも賢愚の差があるからには、一族全員が守れるような團結のきまりがなくては、先祖の御恩にそむくこともでてこよう。今仕事の分擔をつくり(維之以局務)、族規を定め(定之以規程)、能あるものを選び、善をすすめ惡をこらしめ、公私の費用、冠婚葬祭のランクづけ、衣食與馬の分配についてのきまりをつくり、子々孫々守ってゆけるようにしよう。族衆は賛成した」^④と。

そこで定められた局務は次のようである。

- (一)、立主事一人、副二人。睦上下、轄長幼、待賓親、提局務、會財用。
- (二)、庫司二人。行賞罰、管莊宅、送稅租、司契書、時出納。立宅庫、十一人隸。

主事一人。

主酒漿二人。

主倉碓二人。

主園圃收畜四人、主近莊禾稼、桑柘薪炭。

- (三)、立開勘司一人。掌歷卜。主男女之生死、婚姻排行。

- (四)、諸莊各置首一人、副一人。主田地耕種營殖。

- (五)、近莊荆書堂。置掌書一人、主延師友、教成才。

近宅荆小學、置先生二人、授童蒙。

而皆以族長主之。

(六)、一人學醫、以備疾病。

一人學巫、以備塚宅、占禱家故。

(七)、有道院、擇好道者、奉焚修。

かくて、「室に私財なく、厨に別饌なく」、「婢僕を畜えず」、「一犬至らざれば、百犬食せず」と誇稱される義門陳氏の基礎が定められたのである。

當該資料の主要部分は四つに分けて考えることができる。第一は、同族の統轄にあたる主事、副主事についての規定。

第二は同族の經濟を扱う庫司についての規定。第三は處々の莊田の管理についての規定。第四は同族の教化の任務にあたる族長についての規定。である。

ここでは第二の庫司の規定からみてゆきたいが、(二)の規定の主體の構成からみて、庫司二人の主要な任務は宅庫の管理であつたことがうかがわれる。彼の下におかれる十一人の人隸とは奴僕であり、「婢僕」をたくわえずというのが私室が「婢僕」をたくわえないことを意味することがわかるが、同時に、族人二百人（江州圖經）という經濟の規模を考えると、この人隸の數は、それを使役する庫司の主要な任務が宅庫の管理を出なかつたことを推定させる。更に、この二人の庫司の下に、主事以下計九名の族人が仕事を分擔するが、ここでも、「近莊の禾稼、桑柘、薪炭」を管理するものが四名と最も多く、ついで各種の家内手工業を管理するものがならぶという配置も同様の事實、いいかえれば、庫司が「家計經濟」の管轄者であることを示すものといえよう。

以上のような宅庫の管理の狀況に比して第三の處々の莊田の管理の方面(四)は、いわゆる「經營經濟」の面をあらわすと豫想されるにもかかわらず、實際には、各莊に主副各一人をおくという極めて簡単な扱いであり、恐らく各地の莊田の檢校以上の任務はもたなかつたと推定される。いいかえれば義門陳氏の土地所有は初發から、その下の佃戸の經營面での自立を前提とした一種の寄莊に近い實質をもっていたといえよう。逆にいうと、こうした狀況でもその租入の實現が保障され

るだけの社會的規制もまた何らかの形で存在したわけである。

次に同族の教化にあたる族長についての規定(五)にうつると、同族の聚居する中心的な莊の内部、宅の近くに族人子弟の教育のための小學がおかれ、莊の近くには書堂がたてられ、いずれも族長がこれを管理した。書堂については、ここには「莊に近く」というが、全唐文卷八八八の徐鍇の「陳氏書堂記」によれば、崇の子衰は「遂に居の左二十里」に書樓をきずき「堂廡數十間、書を聚むること數千卷、田二十頃、以て游學の資となし、子弟の秀れたる者は、弱冠以上、皆學に就く」とあつて、族田が専ら官界への進出のために備えられたことがわかる。

陳氏と並んで有名な江西路洪州奉新縣の胡氏の書堂についての徐鉉の記(徐公文集卷二八、洪州華山胡氏書堂記)に「築室百區、聚書五千卷」と陳氏に勝るとも劣らぬ規模がみられ、さらに、のちにみる江西路袁州の章氏が「諸子弟は……皆書を積み、方士高僧と往來し、儒生賓客の至るものあれば、皆これを延納し」というのをみれば、書堂の社交界形成¹¹士大夫的結合の場としての意味もものがすことはできない。

この族人の教化面を擔う族長と經濟面を擔う庫司らとの間の關係については、陳氏の家系の検討が若干の手がかりを與えてくれる。

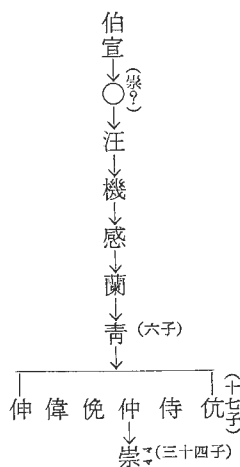
陳氏の家系を傳える資料は主として、宋史列傳系統のものと、江州圖經の系統のもの二つに集約することができるが、兩者はひどく不一致である。

まず列傳によつて伯宣以後の家系を示すと次のようになる。

伯宣^初(居德安、大順^子年^(八九〇)卒)^子崇^{(江州長史、大順元^子年^(八九〇)作家法)}↓衰^{(江州司戶、昇元元^子年^(九三三)受旌表)}↓昉^{(試奉禮郎、開寶初^{弟之子}年^(九六〇)免徭役)}↓鴻^{(太平興國初^弟年^(九七〇)免雜科)}↓兢^{(淳化元年^弟年^(九九〇)貸千石)}↓旭^{(從父弟、至道中^弟年^(九九七)授江州助教)}

ここでは防以下の系譜が父子關係にないことが注目される。いわば、この時點で系譜が家系から族系に變化している。

次に江州圖經によると、



となつて、すべてが父子關係で示されている。ここで問題となるのは、兩者が伯宣以外全く共通の人名をもたないこととともに、江州圖經では伋・侍・仲・俛・偉・伸の六子の記述について、「六而十七、十七而三十四、七世同居、内外二百口、家道益昌、朝廷表其閭、崇仲子也」とあつて、二百口というのは、恐らく唐末同族を結集した時の族人の口數であると推定できるから、崇と伯宣の間に七世の家系を想定しているように見えることであるが、これは江州圖經の作者が、陳氏が唐末に旌表をうけた事實にみあう家系を記述しようとしたところからくる誤傳であらう。

そこで、江州圖經の伯宣の次に崇を補ってみると、宋史が崇↓衰↓昉と傳える父子關係に對して、江州圖經は、崇↓汪↓機という父子關係を傳える。

この不一致については、宋史と圖經のもう一つのくいちがいが参考になる。すなわち、宋史孝義列傳あるいは長編至道二年六月庚申の條に、陳旭が官倉米二千石の貸與の半分を辭退したと記すが、江州圖經では同一の事實が陳早の名で記されている。こうみえてくと一般の記録で旭と諱で記されているのが、家譜では字で早と記し、これをうけた圖經でもまた字で記しているのではないかと疑うことができる。同様に宋史等の諱衰に對して、江州圖經等の字汪（サカン）、諱昉に對して字機（ハジメ）という關係が想定できよう。

このように兩系統の記録をそれぞれ信じることができれば、陳袞・陳昉の二代は陳崇の直系が族長に當っていたと推測できる。その背後には陳崇の働きとともに、陳袞が江州司戸となった實力が支えとなっていたであろう。しかし陳昉以後の族系は父子の關係にはなく、族長の交代も短期間になっている。この點については、有名な鶴林玉露第一集卷五にひかれる江西路撫州金谿の陸象山の同族の累世同居の記事に最年長者が族長にあたっていたと記されること、長編卷百一、天聖元年十二月癸亥條に「江州の民陳蘊は、聚居すること二百年、蘊は年八十にして且つ行義あり」とされていることを参照すれば、この時期から一族の長老あるいは最年長者が族長にあたることになったと思われる。更に前引の撫州の陸氏の場合には、族長の下に陳氏の場合とほぼ同様の局務の割りあてがあり、毎朝夕、族堂に禮拜し、族訓を唱し、族長は子弟の教化放逐の權力をもっていたとされるが、陳氏の場合にもかなり相似た状況を想像することができよう。

以上のようにみれば、陳氏の場合、唐末に同族結集に成功して以來、經濟管理を擔っていたものよりは、族長として教化を司どるものの方が優位にたち、その初期には、族長權は、現實に田園を廣置した陳崇の房系の實力によつてうらうちされてきたが、宋朝政權が成立し、族長權が公的な支持をうるとともに、よりイデオロギー的な性格をつよめ、必らずしも直接の經濟力を必要としなくなったものと推測できよう。

いずれの場合においても、そこでは、一般的に、豪族Ⅱ大家族という形で自然な展開としての性格は弱く、むしろ本來であれば、それぞれ獨立した經濟の主體となるべき各房或は各家の意識的努力による結果としての性格が濃厚である。江州圖經及び德安志によれば、至道中に太宗が、江南の寺觀と德義の家に御書を與えたが、その時陳氏がえたものが三十三本であったというから累世同居とはいえ、その内部は明確に各房に分れていた譯である（時に千口というから各房三十口）。ついで族譜によれば仁宗の時に二九十一莊に析居したという^⑨。時に總口數は二千（長編卷百一、德安志）、あるいは三千（江州圖經）と考えられるので、一莊平均七口十口で、かなり一般の家族規模に近くなっている。このことは、それまでの同居が、同族内の階級矛盾の展開を顕在化させないようにする非常な意識的努力の産物であることを推測

させる。太祖太宗の時期に宋朝が陳氏に對して、徭役、雜科を免じ、每春米二千石を貸與したというのは、共有地が同族の學田ともいふべきものに限られ、莊田の所有經營が、現實には一部の房に集中したであろう陳氏の一族中の貧困者に對する救済措置であつたろう。

陳氏はこうして、意識的な同族結集を通じて大規模な土地所有を確立し、官界に進出した。江州圖經によれば陳崇のち廣義の官人と目されるものは三十三人をかぞえるが、ここで陳崇のちというのは、おそらく仁宗朝に陳氏が析居するまでの期間であらう。

次にこの地方の同族的結集がどの程度一般化できるかを見てゆきたい。

まず陳氏と同じ江州德安縣から見てゆくと、これも大典所收の江州圖經に梅氏の資料がある。それによると、梅氏は「代々德安縣の湧泉にいたが、……唐の會昌中に、梅簡が、始めて宛郎に家し、以後族勢は益々盛んになり、同居共財し仲むつまじかった。宋の皇祐年間に不肖の子弟が縣に析居を訴えたが、梅价の努力で析居はとりやめられた。梅价は仕官して、某曹の郎官にまで昇進した。時に德安縣の王氏、鄭氏ともに族人數百人を數えたので、陳氏とあわせて、德安では陳・梅・王・鄭と稱された」とあり、ここでも會昌年間の徙居からの族勢伸長と、仕官した有力者の同族結集に果す役割の大きさが示される。

ついで同じ江州の德化縣の許氏は「八世同居、長幼七八一口」（宋史列傳、江州圖經）という。江東路池州では青陽縣の方氏が「八世同爨、家屬七百口、居室六百區。每朝鼓を鳴らして會食す。かつて稻五千筭を出して貧民を救済し……天禧中には稅籍錢四百餘千、稅米二千五百石」（宋史列傳）と稱される。方氏の場合には、同籍と會食に重點があるようであるが、稅額の大きさとともに郷民への賑恤が注目される。同じく池州石埭縣の桂氏も「累世同居……今に至るまでその郷に孝義社あり」（大典所引池州府志）。江西路にもどつて瑞州（筠州）では吳氏（大典所引瑞陽志）鄧氏（瑞州府志）がある。袁州になると有名な太平廣記四〇一寶二所引玉堂閑話に記す宜春郡の民章乙がいる。「其の家は孝義をもつて聞こえ數世分異

せず」、「諸子弟は皆善を好みて書を積み、方士高僧と往來し、儒生賓客の至るものあれば、皆これを延納し」、「江西郡内、富盛無比」という。

この他、洪州奉新縣には、南唐から宋代にかけて陳氏と並び稱された胡氏があり（前引徐公文集28、大典所引豫章續志、宋史列傳）、「累世同居し、數百口に至る。學舍を華林山の別墅に構え、書を聚ること萬卷、大いに厨廩を設け、以って四方遊學の士を延く。……淳化中、州境旱數、仲堯廩を發し、市直を減じて以って飢民に賑す」（宋史列傳）という。又大典所引豫章續志の裴氏も洪州に入るであらう。

撫州には先にふれた金谿の陸氏、建昌軍には瞿氏（宋史列傳）、信州には李氏（宋史列傳）、俞氏（宋史列傳、宋太宗實錄卷四四）、周氏（大典所引元一統志）、鄭氏（大典所引廣信府永豐志）等があった。江東路南康軍には洪氏（宋史列傳）があった。

以上の義門の分布をまとめると、江州に三氏、ここから鄱陽湖ぞいに南下して、その西岸の南康軍に一氏、洪州に三氏、餘水をさかのぼって、信州に三氏、盱水に入つて、撫州、建昌軍に各一氏、渝水をさかのぼって、袁州に一氏、その北方の瑞州に一氏がある。この他には池州の二氏のみである。いわばほぼ鄱陽湖を中心に、水系にそつて放射線上にひろがっていることがわかる。

こうした分布が何らかの意味をもつとすれば、そこに想定されるのは、陳氏、胡氏等の江西への移住の傳承と相まつて、唐末の人口移動と土地の開墾の發展であり、更にこの發展の中に、同族結集を有利とした何らかの事情があつたであらうことである。

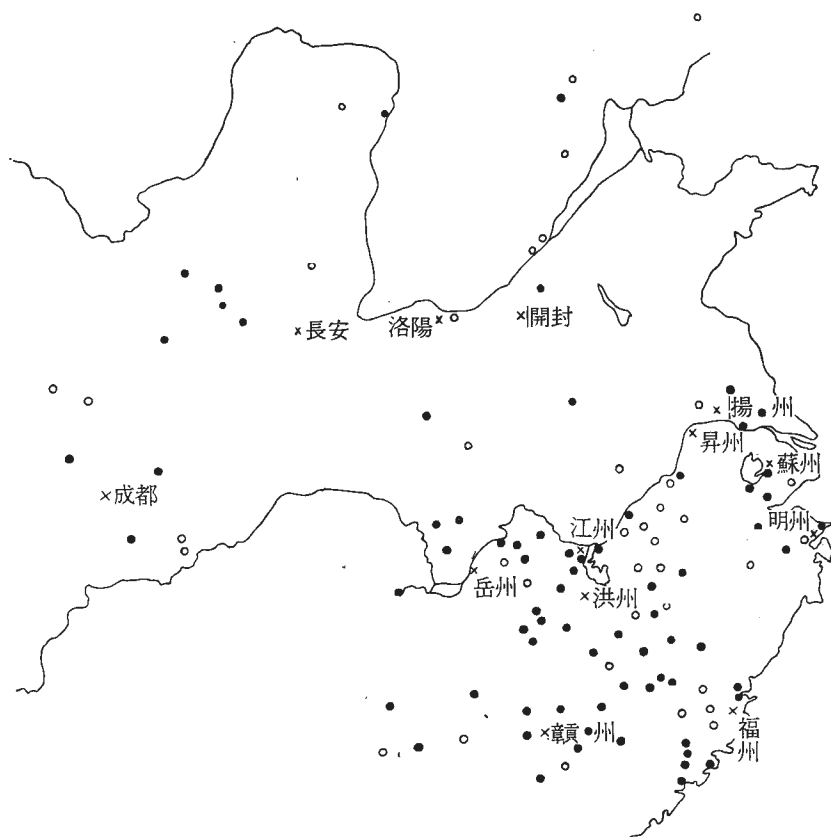
今こうした土地の開発を端的に示すと思われる一つの指標として、唐中期から宋初にかけての新縣の設置を太平寰宇記によつて一覽表として（表Ⅲ）、更にその分布を地圖上に表示すると次のようになる（圖一）。

この二つの分布を見比べる時、特に五代宋初の縣の新設に對して、義門というような特殊の同族結集を生みだした鄱陽湖地域を中心として、その周圍にひろがる、更に大きな放射線上あるいは、同心圓的な地域性をよみとることは不可能であ

〔表Ⅲ〕 太平寰宇記による開元年間以降新設縣一覽

道	府・州	縣	設置年代	道	府・州	縣	設置年代
河南道	開封	東明	963	江南西道	汀宣歙	安泰	981
關西道	鳳翔	萬壽	973			長德	953
	隴	崇信	963		太平池	旌門	763~765
河北道	麟	隴安	969			祁源	766
	坊	昇	753			婺湖	740
	麟	秦	742			繁昌	937~975
	孟	谷	910			蕪陽	713~
劍南西道	魏	陰	734			青建	742
	洩	濟	772		洪	石東	757
江南東道	深	豐	772			分寧	765
	平	澤	713~741			靖安	953
	塞	昌	982			清江	800
	涿	城	769			上新	937~942
	平蜀	新馬	929			浮高	938
		盤康	740		饒信	德梁	952
	資	石	949			興饒	981
	保	化	960~			溪山	716
	梓蘇	雲東	749			貴鉛	937~953
		吳江	749		虔	安遠	758
	杭	新	966			瑞金	765
	湖	安	909			石城	940~
	秀	亨	981			上龍	782
	越	崇德	982			興會	937~953
		昌化	751		袁吉撫	分萬	937~953
	衢	陽	939			龍南	952
	發	浦	~906			宜載	952
	明	化	907~932			泉豐	976~984
	福	海	754			谿黃	984
		田	713~741			谿谿	921~
	南劍	泰	909		江	安昌	960
		貞	741			口子	960
	建	清	766			魚陽	719
		德	933		興國軍	安山	968
	邵武軍	寧	758~760			治仁	963
		懷	836~			遠安	927
	泉	安	982			陽高	939
		浦	946		衡道永全郴	星嘉	943~957
		順	893~			崇永	978
		尤	740			通安	937~953
		松	740			大寧	742
		崇	943~957			安山	944
		光	951~			治仁	959
		歸	976			遠安	967
		建	958			陽高	954
		同	961			高	964
		永	939				982
		清	947				761
		溪	955				725
		德	909~953				

道	府・州	縣	設置年代	道	府・州	縣	設置年代
江南西道	朗南	桃源	964	山南東道	鄧	陽城	981
淮南道	南廬	思邛	722	隨	隨	建寧	737
	泰	舒城	735	荆	唐	寧江	965
		興化	920~		建	沙	965
		興	939		潛	潭	965
		泰	952	隴右道	秦	玉華	963
		如	741	儀	大	安	959
山南西道	天長軍	大巴	734		華	化	964
	合渝	壁川	757		安		



図Ⅰ 太平寰宇記による唐中末期・五代宋初の新設県

○印 第一波・唐中期を中心とする唐代のもの

●印 第二波・五代・宋初のもの

〔表Ⅳ〕

村 名		各 姓 の 頻 度							全體の數	各村での各姓の割合
馬唐東桑葛義北澗禹	墅村武村村村村村村	蕭7	高5	生4	鄧3	王2	胡2		31	0.23
		朱11	任8	皇6	王4	孫4	賈4		48	0.23
馬唐東桑葛義北澗禹	墅村武村村村村村村	朱10							12	0.83
		桑8	樊3	王2	陳2	張2			20	0.40
馬唐東桑葛義北澗禹	墅村武村村村村村村	僧4	葛3	冷2	陳2				15	0.27
		殷15	田2	任2					28	0.54
馬唐東桑葛義北澗禹	墅村武村村村村村村	魏30							36	0.83
		各1							6	0.17
馬唐東桑葛義北澗禹	墅村武村村村村村村	紀7	柳2	夏2	查2	蕭2			26	0.27

ろうか。

二 義門の形成發展とその背景

それでは、このような江南東西地方の生産力の發展が典型的には義門にみられるような同族結集の形をとって實現されたのは何故か、又それはどのように實現されたのか。

ここでは、義門的同族結集が、その出發點においてどのような状況におかれていたのかをまず検討するために、江蘇通志稿金石三にひく潤州仁靜觀魏法師碑（在丹徒縣）をみよう。この碑は潤州仁靜觀の魏法師（諱は隆、字は道隆、任城の人）の遷化にあたってたてられたもので、碑陰は第一列に門人三十三人、第一列のおわりから第八列までは、十二觀十館の道士女官の名前、第九列には捨施檀越中の官位をもつもの、第十列から第十七列までは、馬墅村、唐村、東武村、桑村、葛村、義寧村、北樂村、澗墅村、禹山村の計九村の檀越の名が列記されている。

若干の危険は考えられるとしても、この記名が現實の村落の全成員の記名に近似するものとして扱かえれば、ここに記されている人々の姓の分布を各村落の同族關係をみる手掛かりにできるであらう。

次に、各村で各姓があらわれる回数と、首位の姓が、全體の姓（ここで記される限りで）に對してしめる割合を示そう（表Ⅳ）。

この表をみて第一に氣がつくことは、首位の姓がしめる割合が、東武村の朱

姓、北樂村の魏姓でそれぞれ、80%以上にのぼるのに對して、馬墅村、唐村、葛村、禹山村、潤壁村の五村では20%前後であること、第二に一つの姓が一つの村に集中して、他村にひろがる割合が少ないことの二つである。

ここで、一姓が、記名の大部分をしめる典型的な例として、北樂村の魏氏をとりあげてみよう。この場合には他村に一姓の魏氏もないことが明瞭であるが、更に重要なのは、門人、あるいは官位をもつ檀越の部分に記されている魏氏の恐らく全てが、北樂村の魏氏であつたと推定できることである。

このことを確かめるためには、よく使用される手法であるが、輩字を手がかりにして、同輩行關係を推定すればよい。魏氏の場合には、門人、捨施檀越、北樂村人を一括して、計六七名にのぼるが、そのうち四四名の同輩行者をあげる事ができる。

次にそのうち最も多數の同輩行者を推定できる例を二つあげよう。この兩例ともに、上柱國魏孝孫が關係しているのも興味がある。

一、上柱國孝孫、上柱國孝禮、雲騎尉孝傳、北樂村人孝軌、孝登、孝祖、孝辯、孝寶、孝表、孝裕、孝端、

二、上柱國孝孫、六品子令孫、六品子豪孫、六品子滿孫、北樂村人合孫、

このような狀況は第一に先にのべたように、碑中の魏氏が恐らく全てが北樂村の魏氏であることを示すが、更に、一、二兩方ともが上柱國魏孝孫の一字を共通にしており、一方は他の場合と同じく一般的な手法であるが、二の方は珍しいやり方であるということもみのがせない。この點から推測すると、孝字の輩行が魏氏で現在最も多數をしめるな世代であるとともに、孝孫の系統が一族中最も有力であり、彼の家系では、族としての輩行を長子孝孫の孝で代表させ、家内での輩行は次の孫であらわしたものと思われる。第一列の門人の記名の部分は、記名人中の有力者たちが、全體として、又族内でのランクに従って並べられてあるように思われるが、そこでは魏氏の場合、前瀛州清苑縣令魏鸞、上柱國魏孝孫、江寧縣助教六品子魏士賢……とつづき、最後に六品子魏豪孫、同魏滿孫で終っているのもこのような推定を助けるであろう。

以上のようにみると、北樂村の魏氏は、魏孝孫の系統を中心としながら、大勢力をつくりあげ、北樂村はその一圓的支配下にあったことをしりうる。その前縣令は二名、前縣尉二名、州參軍三名、縣博士二名、鄉博士一名、縣助教一名。勳官では上柱國三名、上騎都尉二名、騎都尉二名、飛騎尉一名。文散官では登仕郎一名、文林郎二名、將仕郎一名、その他六品子四名というのが魏氏一族の全貌である。一族の世襲を許される官人永業田は上柱國三名のみでも九十頃に達している。北樂村を完全に掌握し、一族の中に實際の文官になるものと、勳官によって、大幅な官人永業田の所有を許されるものをふりわけた魏氏の構成からして、このような官人永業田は名目だけでなく、實際に魏氏によって所有されており、ここではむしろ魏氏の所有にあわせた形で勳官がくまれているという状況を想定できよう。いわば唐初の地主の一典型としてよい例の一つではないだろうか。

以上のような北樂村の場合と對照的な例としては、唐村の場合があげられる。唐村についても北樂村で魏氏をあつかったのと同様に門人有官檀越をくみこんだ形で記名の整理をすると次のようになる(表V)。?印は同村人と確定はできないものである。

〔表V〕 唐村の構成者たち

族名	個	人	名	計		
朱氏	騎都尉伯寵？	騎都尉季莊？	唐村人與貴、興將、興至	他唐村人八名	十三名	
任氏	法師元秀？	上柱國雉？	騎都尉文彥	他唐村人八名	十一名	
皇氏	上輕車都尉法明、	飛騎尉法恭、	唐村人法達、	孝靜、孝則	他唐村人三名	八名
孫氏	道士元寵？	上護軍道從？	輕車都尉道通？	上騎都尉郭和？	唐村人義門孫難、罕、和、黃頭	八名
賈氏	騎都尉孝敬？	飛騎尉貴兒？	唐村人仕詮、	仕懷	他二名	七名
王氏	道士任開？	上騎都尉貴郎？	唐村人里正秀才、	里正君禮	他二名	六名

この表にみる有力者たちは最大限の舉例であつて必らずしも全部を唐村人と確定できないが、それらを全てもちこんで各姓の有力者を總計しても、魏家のそれには遠く及ばない。恐らくここに示された人々は、中小地主・富農及び自作農と

して扱いうるであろう。

ここには北樂村の場合とは全くことなつて勢力にさほどの差のないこれらの人々の間のせめぎあいが見られる。そしてここで他地にはみられない義門孫氏の記名と、里正王秀才、里正王君禮の記名をみることができる。里正はこの他、顔氏に一名、范氏に一名、嚴氏に一名みられるが、これらは他に同姓の記名をみない人々である。

こうしてみると唐村では魏氏の一圓的所有の下にある北樂村とはことなつて、中小地主・富農・自作農のせめぎあいが見られ、ここではじめて、里正がそれなりの役職として認められる状況がでていたこと、こうしたせめぎあいと恐らくは関連して義門という形の意識的な同族結集がみられたことが推定できる。

そしてこのような状況の背景には、すでに前節の表Ⅳ、圖Ⅰにみたような江東地域の唐中期の縣の新置にみられるこの地域の耕地開墾の發展がある。

ここで、江東地域から江西地域へと擴がる耕地開墾の動き、それと平行する義門の江西への展開を想起し、そこに新しい生産力の主體形成をめざしての血縁的再結集（義門）、これらの主體の相互結合としての村落結合、その代表的存在としての郷役（里正等）という状況を想定できないだろうか。いわば村落秩序の現實の組織者としての中小地主・自作農の擡頭の始發状況をここにみることは不可能であろうか。このように考えることができれば、こうした新しい生産力の擔い手であり、新しい村落結合の構成員として成長していった層こそ、宋代の主戸の前身であつたと推測できよう。

これらの成長のあとは、資料的には、唐末の村落状況の中にみることができると推定できる。

元稹の元氏長慶集卷五四の「有唐贈太子少保崔公墓誌銘」は、長慶三年（八三二）に卒した崔俊について、かれが宣州南陵の令となつた時に、「南陵の租稅納入額は三萬貫であつたが、租稅戸の貧富には、天地の差があり、同じ工合に割りつけることは不可能であつたので……村の佛舎にゆき、村の年寄りたち（老艾十餘人）をあつめ、税入の大差のないものはさておき、貧富高下の極めて不當に格づけされているものだけを指摘させ、……各村戸からあつめた調書をもつて租稅納入の

原籍とし」その結果「十萬錢から千百錢に下ったものがある一方、千百錢から十萬錢に上るものがあつた」といわれる。又これは時期には少し早い淮南の廬州の例であるが、全唐文四七八、楊憑の手になる羅珣の德政碑には、廬州刺史の羅珣が「定賦の際」「人を集めて正坐せしめ、衆もて其の重輕を議せしめ、里胥は籍に書し、一辭を措くをうるなし」とある。これらに示される状況は、在地の秩序が次第にのちの主戸につながる層の手ににぎられてゆくことを示すものである。杜牧の樊川文集卷八の「唐故處州刺史李君墓誌銘」では、會昌五年（855）に卒した李方玄が池州刺史となつて「復た戸税を定め、豪猾と沈浮するものを得ること凡そ七千餘戸、貧弱に哀入して、其の賦を加えず」というのも「其の賦を加えず」前提の下に、これらの郷役層をつかんで行われたものであろう。以上は職役の面からの資料であるが、農業生産の面においても、全唐文六九五の韋灌の「宣州南陵縣大農陂記」（元和八年六月十五日（813））に記す「卒歲の漑千頃」という大陂は南陵令の范氏が「郷老里正尹を召してこれを計り」「農隙の三旬」に施工したものである。又この碑文は、このことを記念せんとした、邑長・郷將・錄事・耆壽、佐史及び數人の百姓が韋灌に請うたものであるという。これらの史料からうかがわれるところは、一方では、貧富の差が一層擴大するとともに、村落結合のイニシアティブが在地の新興の地主富農層によってとられてゐることである。^⑤これはいいかえれば、大土地所有が消滅するのではなく、大土地所有をもふくめて、土地所有一般が、このような在地の村落結合を基礎にくみかえられつつあつたことを示すものであろう。

以上にみたような村落結合の最も端的な表現は主戸客戸制度であらう。とくに本稿でとりあげた江東西という地域はその開發に伴つて多くの客來戸が流入しているが、のちの考證とも關係するが汀州、贛州といった客家の流入が多かつたとされる諸州が、太平寰宇記ではそれより以北の各州に對して、著しく客戸率の低い地帯に屬していることから、主客問題を單に客來でもつてとくことはできず、こうした村落秩序の面からの把握が必要とされることは明らかであらう。

今この地域に、この點の追求に役立ちそうな資料がある。それは羅香林氏の「客家史料匯篇」に採録された花縣洪氏宗

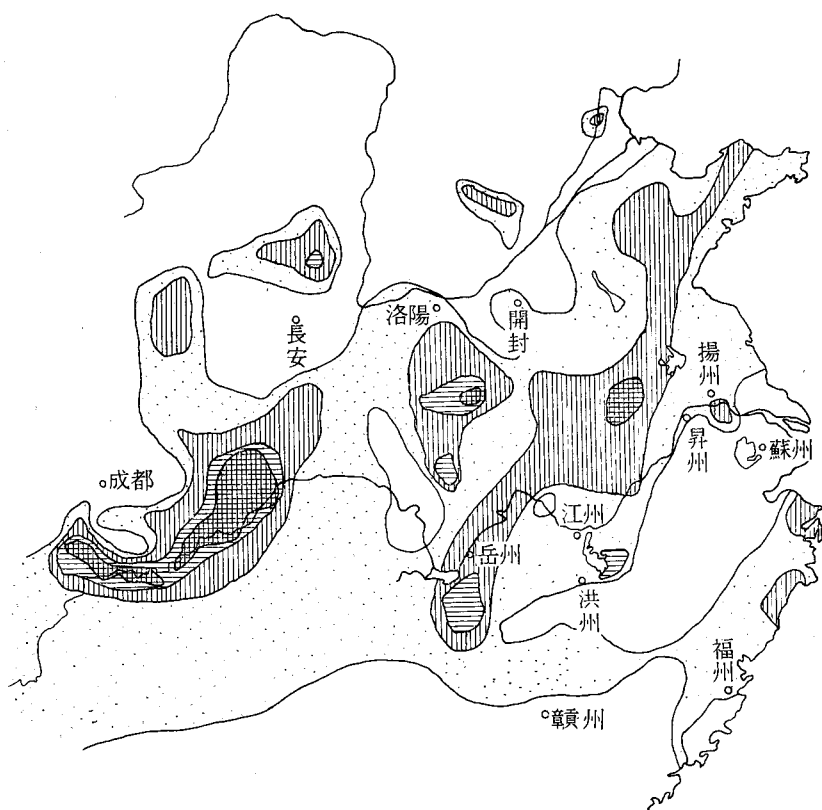
譜に附されている「滄潭隱記」の次のような記録である。少し長くなるが、その要點を記しておきたい。

洪氏世居徽州婺源黃荆墩。唐末避亂、徙居饒州樂平之東。曰巖前、曰洪源、七百餘家。世業讀書耕桑。高祖士良公、志操不同、力敦二孫立門戶。嘗因事入饒城之東五十里、曰滄潭。舟數往來、觀其山環水匯、可卜宅兆。于是每歸必遺主人雷氏以鹽、歲久寢熟。秋成時、收穀數百斛、分寄雷族家。越歲、置酒集諸人曰、吾誠慙、每歲以穀相溷、欲求數尺地、自立倉以貯、可乎。皆曰諾。獨一叟持不可。或曰、叟惟強介不可問、惟婦言是聽。乃餌嫗以雙縑。嫗遂誘其夫曰、洪公往來居地歲久、人情稔厚。今求片地、奈何不與。叟即授以契、乃如所願。

この話は凡そ北宋中期ごろの出來事と考えられる。「高祖士良公」が「力めて二孫をして門戶を立てしめた」というのは、巖前・洪源に移住した洪氏がある程度と同籍關係にあったこと、「士良公」がその二孫に、この同籍關係から脱して、獨立の戸籍（『主戸籍』）をたてるように激勵したことを意味する。

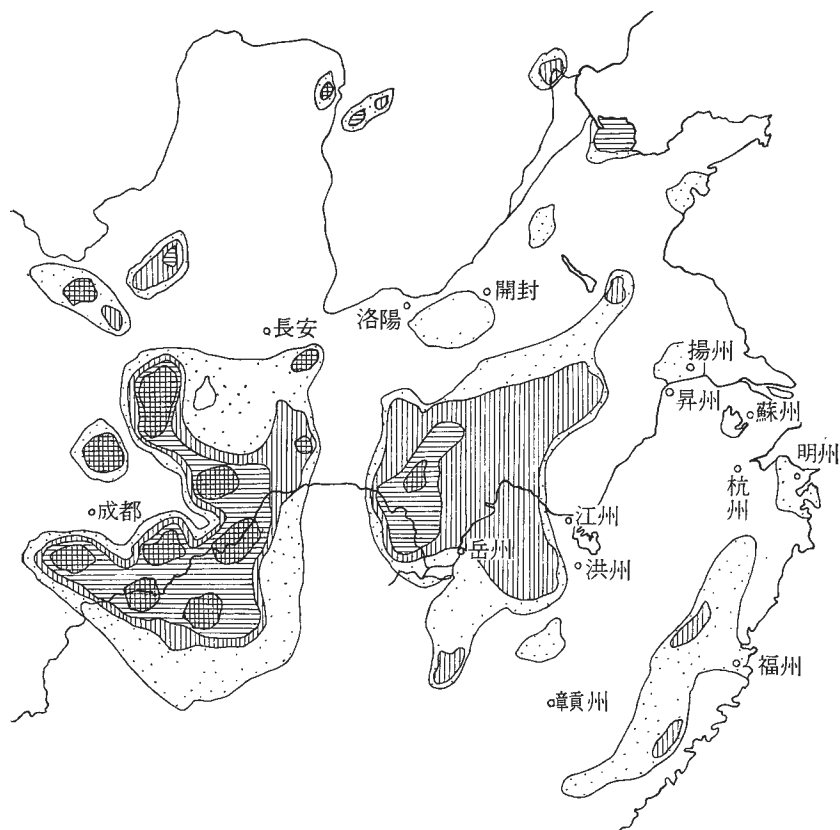
ところで獨立の主戸となるためには、獨自の土地を所有しなければならないが、饒州樂平ではそれが不可能であったので、彼がしばしば往來した滄潭に土地を求めようとし、その土地の有力者雷氏に近づきを求め、ころあいを見計って「立倉の地」をうってもらうように交渉した。ところが、雷氏一族のただ一人の反對でこの話がこわれたというのである。この村落は雷氏の同姓村落であった可能性があり、そのために問題が鮮明にあらわれているのかもしれないが、ある村落で土地を所有するためには、その村落の成員の合意を何らかの形で必要とすることをこの事實は示しているのではないだろうか。そしてまた、こうした合意のある土地所有は、たとえ「立倉の地」に限られていても、主戸たる位置を可能にしたわけである。そして、こうした同意をえた時、洪氏は客來戸であるにもかかわらず主戸となりえたものと思われる。

同姓村落あるいは少くとも雷氏のような有力な族が押えている村でなければ、このような規制はこれほど明白單純な形ではでてこないであろう。しかし例えば宋會要食貨六一民產雜錄雍熙三年三月の詔には、農民がその全田產を典賣する場合には、その田地に接する全ての田地の所有者Ⅱ四隣に、その田地の要不要をたしかめたのちに、はじめて他者に典賣で



図Ⅱ 太平寶字記の客戶率（客戶數／主戶數）の分布
（以下の數値は全て四捨五入したもの）

- 客戶率 0.8 以上の地帯
- ▨ 客戶率 0.7 の地帯
- ▧ 客戶率 0.6 の地帯
- ▩ 客戶率 0.5 の地帯



図Ⅲ 元豐九域志の客戶率（客戶數／主戶數）の分布
（以下の數値は全て四捨五入したもの）

- 客戶率0.8以上の地帯
- ▨ 客戶率0.7の地帯
- ▧ 客戶率0.6の地帯
- ▦ 客戶率0.5の地帯

きるといふ一般的な規定があつたことを示しているが、これもまた土地所有者＝村落成員＝主戸という關係の一表現ではなからうか。

ところで、ここに示した二つの資料は、第一のものは江東路のものであり、第二のものは全國的な規定である。そこで、より一般的な視野からこの特定の江南東西路地方の主戸客戶制度という問題に接近するために、あらためて、太平寰宇記と元豐九域志に記された主戸客戶の統計の數字を問題にしたい。その際すでにこれまで、この統計をとりあげてこられた加藤繁、柳田節子兩氏の場合^⑧には、州別に出されている數字を路分ごとにまとめているので、せっかくの州別の數字が生きてこず、そのため、そこにみられた傾向性が明瞭につかまれていない。ここでは、あらためて、各州毎の數字をもとに、一種の等率線を用いて、地圖上に表現するようにした(圖Ⅱ・圖Ⅲ)。

本来ならば、この圖のもとになった數字を資料としてそえるべきであるが、とてもその餘裕がないので、元豐九域志については、加藤氏「宋代の主客戶統計」(史學十二の三・支那經濟史考證下)の數字をそのまま借用して地圖上にトレースしたこと(太平寰宇記の場合は筆者の計算によるが)を記しておきたい。^⑨柳田氏の主戸分の客戶から、加藤氏の(主戸＋客戶)分の客戶に數字が逆轉しているのはそのためである。

こうしてみると、兩圖ともに、揚子江流域を中心として客戶率が高く、中でも、京東東路から荆湖南北にかけてと、夔州路から潼川路の一部にかけてとに、客戶率の極めて高い地域が横たわり、そこから周邊への率の低下という形で、一見して有意にみえる分布がみられる。特に、元豐九域志の場合、客戶率の二つの頂點、荆湖北路一帯と夔州路一帯が、實證的研究によって、この時期の最もおくれた生産關係のみられた地帯であることが實證されていることは重要である。

この地域は、いわゆる「地廣人稀」の地帯を形成しているが、問題は單純に勞働力と土地との量的對比という形で理解することはできない。一般的にいえば、いつの時代でも未開墾地はあるわけで、問題はおくれた生産關係が、優越しているため開墾が仲々すすまず、一方では新しい生産様式の普及によって、從來開墾地、開墾對象とならなかつた土地が開墾

可能地として立ちあらわれてくることであらう。

北宋期においての「地廣人稀」の地域を、このように設定すれば、唐中期から宋初にかけて、この地域の外延にあって、めざましい開發の進行した江南東西の地域でこそ新しい生産様式の普及と新しい生産力と所有の主體の形成を問題とすべきであらう。そして、この分布圖にみられる後進地域の客戶率の高さと、唐代の北樂村の魏氏の如き一圓的大土地所有とを交錯させてみる時、江南東西路における主戸層の形成こそがこうした新しい方向の進展の一つのメルクマールであり、以上にみてきた義門というような血縁的再結集や村落結合ともからみあった郷役の成長、主戸相互の結合としての村落規制の展開等が、この現實の表現であつたと考えられるのではないだろうか。

さて、唐代から北宋初期にかけて、江南東西路で展開した事態を以上のように考えると、そこにはまだ多くの問題點が残されている。その一つは、この地域において、主戸客戶制度がこうした形成史をもっていたとすると、そこでは主戸層の形成の反面として多くの佃戸層が定着しているはずであるのに、宋代に入ると、統計上この地域はもつとも客戶率の低い地帯になることである。また義門の發展過程を以上のように整理したばあい。宋代のこの地域の義門はすでに一種の大土地所有者となっており、いわば本章で想定している線をこえた存在にまでのしあがっていることである。

この點の第一の原因は、この地域の生産力の極めて急激な擴大による上層農の急激な浮上、そうした状況に支えられて、階級矛盾の展開が他地域よりおくらされ、矛盾の展開が獨特の形をとつたことにあつたと思われる。そして第二の原因は、以上のような展開の上での南唐末の政局とその解決のあり方である。

第二の點については、次章で考えるとして、ここでは第一の點と關連して、恐らくは、急速に展開した開發に對する主導權の掌握等を契機として、地主たちに對して佃戸たちが、社會的にみとめられた隸屬的狀況にあつたようにみえること、しかもこのような隸屬的關係は、例えば南唐の陳氏の土地所有がいわば寄莊に近い實質上經營經濟面の弱さをもつたことと考えあわせて、事態の變化によっては容易に崩壊する體のものであつたことを推測しておきたい。この地域での地主

と佃戸のこうした關係をうかがわせるものは、いわゆる「團」のこの地方（から荆湖南北路にかけての）獨特の性格である。馬氏南唐書卷五に、南唐朝の兵力徵集について記すが、その中に、「客戸の内に於て、三丁あるものは、一卒を抽いて團軍といひ……物力戸を師として統せしめた」という。この團軍というものは十國春秋卷十七に團軍とするのが正しいであろう。これは時代が下るが、宋會要兵二郷兵の慶元二年十一月十八日條（二六〇）に、潭州で保伍法を行なおうとして、「都内で又一名の物力高きものを推して團長とし、保正副とともにその丁を統率する」とあるのに極めてよく似ている。ここでは地主の佃戸に對する規制力がそのまま兵力の構成に役立てられている。

このような土團軍の形成はすでに唐中末期にさかのぼる。新唐書列傳卷一一五杜洪傳に「乾符末、黃巢の江南を亂すや、永興の民（江西路興國軍）、皆亡げて盜となる。刺史崔紹は民の疆雄なる者を募りて、土團軍を爲る。賊あえて侵さず。是に於いて人・人（皆）兵を知る」とあり、つづいて「この時、永興の民吳討、黃州に據り、駱殷は永興に據る。二人は土團に隸せしものなり、故に軍勦あきこと甚し」と軍の剽悍な理由を土團出身に求めている。又有名な杜牧の樊川文集卷十一「上李太尉論江賊書」に「江南の土人は、相ともに表裏をなし、其の多少を校はかれば、十にその半ばに居る。……村郷聚落は皆兵杖あり、公然として賊を作す。十家九親、江淮の所由は屹つに其の間に入らず」という。「相ともに表裏をなし」というのは、江賊と通じることというが、崔紹の土團は、こうして郷村の中の秩序と相即的に存在した武力を上から追認したものである。

つづいて、十國春秋卷二、武義元年十二月（二六六）、同書卷十盧樞傳を参照すると、民間の私的武裝を禁じていた吳朝の政策に反して、「民兵を團結して、郷里を自衛せしめよ」とする盧樞の一言が採用され、いわば唐末の矛盾の中から生みだされてきた流民傭兵等を基盤にした吳朝的體制が、地域的秩序をふまえた南唐的體制にきりかえられたことをしりうる。

この他、虔州の譚全播の勢力^⑥、鎮南節度使を自稱して洪州に進攻した撫州刺史危全諷の勢力等も、その實質は土團兵に

近かったと推測することができる。さらにいえば、宋朝の兵が金陵をかこんだ時、最後に南唐が望みをかけたのは「江西土客の義師一十五萬」（馬氏南唐書卷二三徐鉉傳）であった。

いわば南唐朝とその基盤たる地主層のよってたつところは、こうした「團」にみられるような佃戸への支配力と、こうした個々の地主佃戸の関係を村落規模でうらづける主戸客戸の制度にあったわけである。

三 南唐朝の土地政策をめぐる――潘佑と徐鉉――

最初にみたように、南唐朝の最末期（開寶六年（九七五）、同八年南唐滅亡）に行なわれたいわゆる潘佑の改革については、中村治兵衛氏と西川正夫氏の全く對立する二つの見解がある。

ここでは、南唐朝の土地政策の系譜と、その中での潘佑の方向の位置づけを探るという形で考えてゆきたいが、その前に、兩氏が宋會要食貨六一民產雜錄、大中祥符七年七月の「詔、江南僞命日民田、並見佃人爲主、訟者官勿爲理、克復後者、論如法」という記事を直接に潘佑の改革と結びつけて「民田並見佃人爲主」という詔が潘佑の改革にあたっていたとされたと考えられていることに疑問を呈しておきたい。これは中村氏が實質的にはこういう意味だと注記された解釋（同論文注21）そのものが正しいであろう。それは同じ民產雜錄の建隆三年十二月條（九六一）に、物業を典當して三十年をこえた時にその物業の所有權を見佃者にうつすか否かの議論があり、宋會要食貨六一水利雜錄、天禧四年七月（一〇二〇）の條に、江淮南の陂塘に耕種している農民で、二十年をすぎるものは、「舊に依つて主となさしむ」というように一定の年限によって占有權の所有權への轉化を認める一般的規定のうちにふくめて考えることができよう。ただ大中祥符詔の方が「訟者官勿爲理」とあるのは建隆詔が「官印元契があれば、年限がすぎても買ひもどしを許す」とするのに對して、見佃人の保護が徹底している。これには、やはり潘佑の改革及び、宋朝の南唐征服のもたらした結果としての土地所有關係の變動を豫想すべきであらう。

さて、ある程度資料のえられる南唐朝の土地政策で、當面の問題と關係づけることのできそうなものが二つある。

その一つは、保大十一年（三三）、洪・饒・吉・筠等の江西諸州の民牛を發して行なわせたという、淮南楚州の屯田の築塘（白水塘）である。

これは、南唐朝がその直接の基盤とする屯田支配を確立し、ひろげるため「諸州縣の陂塘の湮廢せるものは皆これを修せしむ。ここにおいて力役暴かに興り、楚州常州を甚しとなす」という一般的政策の中で行なわれたものであるが、その規模の大きさ（洪・吉・饒・筠の民牛を以てゆく）と民田の侵害（強いて民田を奪いて屯田となす）とともに、ここで注目すべきは、後周との緊張の中で、この工事にとりくだねらいである。

「江淮騒然」たる中で、工事の中止を上言した徐鉉に對して、元宗李璟は「吾が國は兵數十萬、安くんぞよく食せずして邊を防がんや」とその目的が、政權の軍事的要求からくる強權的な國家的土地所有（屯田としての）の確立擴大にあったことを示している。又この施策を遂行する責任者が元宗の寵臣車延規であり、視察の命をうけた徐鉉が獨斷でこの工事をやめさせ、元宗は「徐鉉を流したが、白水塘は竟にならなかつた」という拮抗關係にも注意すべきである。

その第二は、馬氏南唐書卷十九誅死傳にみられる褚仁規の事績である。^⑤かれは海陵鹽監使（淮東泰州）となり知海陵縣を兼ねたが、政府からの戰費徵達に對應するために「民家の有つ所を行視せしめ、籍を擧げてこれを取り、事おわれれば則ち次を以て償備して連遺する所なし。故を以て民甚しくは怨まず、しかも公費を供億すること限極を知らず」と一種の國有化政策をうちだした。この場合には、資料にも「部する所は漁鹽竹草の地」といい、海陵監は有名な淮鹽の供給處であつたから、かれの政策の對象となつたのも恐らくは鹽場を主としたであらうし、鹽場であればこそ、民が甚しくはうらまない程度の保障を（鹽價の操作により）行ないえたものと思われる。

この二つの政策に共通してみられるものは一種の封建的國有化政策であり、それは鹽利・屯田等の限られた國有對象の擴大を一般民の犠牲の上にやりぬこうとする志向である。そして、これらの政策が、第一の場合には元宗の言として明白

に示され、第二の場合にも「國家毎に大役あり、常賦にては給する能わず」というように、國際的緊張を第一の理由として施行されていることも忘れてはならない。

以上のように南唐朝の土地政策の中に、集權國有化の流れをみ、その背後に後周・宋との對抗關係をみれば、潘佑の改革もまた同じ流れの中で理解することは困難ではなからう。

潘佑の改革について、現存の資料は、「井田の法を復し、深く兼併を抑えんとし、貧者の田を買うものあれば、皆これを還さしめ、又周禮によりて民籍を造り、牛籍を復し、盡く曠土を開きて以て桑を植えしめんとし」「民間の舟車碇礎箱篋銀釧の物、悉くこれを籍した。」と記しているが、ここに、從來、屯田、鹽場の如き限られた局面にみられた國有の狀況を、全國的におしおよぼそうとする夢想的反動的性格をみることは可能であらう。

潘佑は「時に南唐日に衰削し、事を用うるもの、位を充めて爲す所なし」という狀況の下でこの改革をおしすすめ、事ならざるや「陛下力めて姦邪を蔽い、曲げて詭僞を容る。……桀紂孫皓に及ばざること遠きなり、臣終に姦臣と雜處し、亡國の主に事うる能わず」と極論して自害したという。ここにいわゆる潘佑の改革の基本的目的をうかがうことができる。

筆者はここで、彼の改革を反動的夢想的とよんだが、それはこの時期の社會狀況がすでにこうした均田的施策をうけないままに成長していると考えるからである。前章までにみてきたような地主的土地所有の展開、それに相應した主客戸制度の確立は、すでに、唐朝的とはいえない段階にあらうし、先にみた元宗期の屯田政策はそれ自體挫折しただけでなく恐らくそのためにその二年後の周軍の進攻にあつて屯田民が、「争いて牛酒を奉じて迎勞」する事態を招き、周軍がその期待にそむくや「山澤に相聚り、堡壁を立てて自ら固め」そのため「先に得る所の唐の諸州は、多く復た唐の有とな」という活躍によつて、南唐の屯田をやがて廢止にみちびくほどの成長をみせていたのである（西川氏、松井氏前掲稿參照）。いわば全國を屯田化する方向で企畫された改革の失敗は當然であらう。

以上のような南唐の土地政策の流れの中から、三つの勢力をみいだすことは困難ではなからう。その第一は、潘佑らに代表される皇權派Ⅱシビアな國際認識の上に立つて國有集權化政策をすすめる勢力、徐鉉らに代表される地主官僚派Ⅱ現狀維持派、及びそのいずれともことなる利益をもつ一部地主富農、直接耕作者農民Ⅱその動きは當面屯田民の動きで象徴的にとらえることができる、の三つの勢力がそれである。次にこうした區分けをもう少しこまかくみてゆこう。

徐鉉と潘佑の對立については、史虛白の釣磯立談に「徐鉉と其の弟徐鍇とは、久しく眷顧を破り、家業素より富貴、多く奇書を收む。弟兄皆力學し、儒術をもつて一時に名あり。ここを以て後進晩生宗尙せざるなし。唯、張洎、潘佑、毎々訕議す」と、いわば多數派徐鉉に對する少數派潘佑の挑戰的態度を傳えている。馬氏南唐書卷六女憲傳によれば、下つて開寶元年（九六〇）、立后の議にあたつて、中書舍人徐鉉と知制誥潘佑が參議したが、樂を用いるか否かからはじまつて、車服の制に至るまで、ことごとく兩者の意見が對立してつきず、後主が、文安郡公徐遊にその是非を評せしめたが、「時に佑方に寵用せられ、遊は旨を希めて佑を是となす」といい、皇帝派潘佑の擡頭をみることが出来る。

こうした對照は兩者の生活史、性格にまで立ち入つて、肉付けすることが出来る。潘佑の祖父潘貴は盧龍節度使劉仁恭につかえたが、その子守光は仁恭を幽閉して燕王を名のり、潘貴を殺し、父處常は南唐に亡命した。その子潘佑が、南唐の政權強化・皇帝權強化を最大の目的とするに至つたのも不思議ではない。かくて佑は「生れながらにして、氣宇孤峻、門を閉して苦學し、資産を營まず、一方では同じく亡命者であつたもと道士李平と交際し、家に靜（淨）室をおき、すでに仙籍にある父處常に見えんとした。

これに對して徐鉉は、徐公文集にのせる行狀によれば「公は内外の族において、視ること疏密なく、これを待すること一の如し」というように、南唐の地主士大夫的モラル（義門を想起せよ）を體現する典型的人物といえよう。彼の文集には「洪州華山胡氏書堂記」があり、義門胡氏を顯賞しているが、その死にあつても、遺言により、胡氏の迎えをうけ、洪州奉新縣にほうむられた。その弟徐鍇が義門陳氏書堂記を草したものも有名な話であつたようである（江表志下）。一方かれ

らの國際情勢認識の甘さは、一方で潘佑の改革の行なわれた開寶六年（九三三）、國信使となつて來訪した廬多遜の詭計にひつかかつて、江南地方の「圖經」を宋朝に送り「是に於て江南十九州の形勢、戸口の多寡」が盡く宋朝に握られたとする大失敗（長編同年夏四月條）に關連して中書舍人徐鉉の名がみえているところからも伺うことができる。

自らの社會的基盤を破壊する危険をあえてしてまで抗戦しようとする潘佑派の弱點についてはすでにふれたが、問題は、徐鉉らの見通し、あるいは見通しのなさの現實からの遊離である。西川氏の成果をかりれば宋朝の徹底的な征服策によつて、「邦國淪胥するに及んで、豪右降替し、向の聚斂する者、翦焉餘りなし」「金陵の破れてより、多く貧困失職す」という狀況が來され、舊南唐朝の支配階層が決定的打撃をうけている。

ここにみられるのは、潘佑派・徐鉉派をひつくるめての現實支配能力の缺除であつた。

それはまた、吳朝の時の「是の時、烈祖の府庭甚だ嚴し。布衣遊士は歳をふるも一見するをえず」（十國春秋卷九徐善傳）という軍事故權から「國中寃あるもの、多く御橋の下に立ちこれを拜橋という。甚しきは長釘を操り、巨斧を攜えて脚に釘す。又闖入して殿庭の下に立つ者あり、拜殿進士という。曹覲は南省の下第、乃を足に釘し、謝祕は下第、殿に立ちて寃を稱す。舉人の風、地を掃けり」（江表志中）という私的な恩寵の世界の形成をその背景の一つとしている（又西川氏前掲稿參照）。これは又、吳南唐朝を通じてみられた集權と分權の矛盾が统一的に解決されなかつたことをも意味するであらう。

そして、南唐と周・宋の戦斗の中で、周兵に果敢な闘いをいどんだ屯田民^①白甲軍や、「巷斗して」宋軍を拒いだといふ江州の人民の姿（長編開寶九年四月）をみる時、潘佑、徐鉉兩派のそれぞれの失策が、ここにいう第三の勢力の飛躍的發展を來したことを想像できないであらうか。潘佑の改革に、北宋中期の客戶率の低さの沿源をもとめ、そこに均產的要素をみとめた中村氏の見解を、逆の面から肯定し、西川氏の重視された宋朝の征服を江東西發展の契機とする見方をさらにそこにつけ加えて考えようとするのが本章の結論とならう。

ま と め

唐中期から五代をへて宋初に至るまで、中國全土でもっとも開發が急速に進行したのは江南東西路一帯（及び兩浙の一部・福建）であり概していえば、開發の重點は唐中期の江東（及び兩浙の一部）から、五代宋初の江西（福建）へと移動している。

この開發進行の一つの起點となった江東において、典型的には二つの土地所有・經營の主體が區別された。一つは一村を一圓的に支配し、唐朝官僚の母胎となったような大土地所有であり、他の一つは自作農・富農・中小地主ともいふべき層である。そしてこの著しい開墾開發の主體となったのは、後者であったと思われる。かれらは新しい生産力の擔い手となるために、血縁關係を利用して勢力の結集を計り（義門）、新しい生産力を保障するための村落結合の形成をおしすすめた。

そうした動きは典型的には、かれらの中の有力者による郷役の掌握⇨租稅徵收（逆にいえば土地所有）、水利工事が、これらの村落結合を媒介に（衆戸の參議という形で）行なわれ、郷役がまた、この村落結合の支持によって、唐朝の收奪を防ぐ役割を果たした（いわゆる所由腹内^⑧）點にあらわれてくる。こうして開墾・地域開發の主體となり、郷役を把握しながら成長した層を宋代の主戸の前身とみなすことができる。

かれらは唐朝の收奪の重點が江淮にむけられるという唐朝支配體制の地域的構造とも關連して、強烈な反唐朝的性格をもっていた（樊川文集）が、村落の内部では寄生的大地主（唐末宋初の資料にみえる、義門は多くこうした層の仲間入をしている）から、中小地主、富農、自作農、小作農、浮浪人までをふくみ、實質的には多くの矛盾をかかえていた。實際には唐末に、これら主戸層を中心とする生産様式の上に立ちながら、唐朝地方官と大地主のインシァティブで、大規模な水利工事が行なわれるという事態もここにみられる^⑨。

、以上のような主戸層を中心とする村落結合の體制の表現が主戸客戸制度であり、そこでは土地所有者とは、村落的にみとめられた土地所有者^①主戸として基本的には把握されよう。又こうした状況の中での土地所有者と非土地所有者の間の支配隷屬關係の一つの表現が「團」であり、この地域の「團」の内容は獨特のものがあつた。有名な宋會要食貨農田雜錄の天聖五年十一月の勅^②「舊條にては、私下の分田の客は、非時には起移するをえず」というのは、こうした團の状況とも関連して考えるべきであらう。しかし又、太平寰宇記、元豐九域志の主戸客戸別統計の全體的趨勢からして、こうした田主の田客に對する直接的支配は基本的には古い形のものであつて、宋代以後の特色は、こうした支配がもっと昇華された形をとつていた點にあると思われることも重要である。

以上のような状況に直面していた南唐朝は、その成立の経緯からしても二重の保守性反動性をもっていたと思われる。その第一は、その軍事力を中心とする政權中樞部の古さ^③植民地政權の性格であり（潘祐に代表される）、第二はその基盤となつた大土地所有者がもつ保守性（寄莊的土地所有にみられる^④徐鉉らに代表される）であつた。

唐中末朝から南唐にかけてのこの地域が、こうした多くの矛盾をはらみながらも、矛盾の劇的爆發をさけてこられたのは、何よりもこの地域の生産力の急速な發展によると思われるが、全中國的な矛盾の激化は、南唐政權に對しては、北方政權の攻撃という形をとつてあらわれ、その過程の中で、これら二つの保守的勢力をつきやぶる動きが、その内部でも成長してきたといえよう。具體的には、國際緊張を理由とした潘佑の改革、宋朝による南唐支配者層への痛撃を契機として、新興地主自作農の勢力の著しい伸長がみられたものといえよう。

註

① 五代宋における江西の新興官僚（和田博士還曆記念東洋史論叢）

② 唐末梁初華南の客戸と客家盧氏（社會經濟史學三三の五）

③ 五代江南の土地改革（和田博士還曆記念東洋史論叢）

④ 吳・南唐兩王朝の國家權力の性格——宋代國制史研究序説のために——法制史研究九

⑤ 松井秀一「唐末の民衆叛亂と五代の形勢」(岩波世界歴史6)及びその前提としての同氏「八世紀中華頃の江淮の叛亂」(北大史學二號)「唐代後半期の江淮について—江賊及び康全泰・裴南の叛亂を中心として」(史學雜誌66の2)

⑥ 注④⑤論文、及び堀敏一「黃巢の叛亂」(東洋文化研究所紀要13)谷川道雄「龐勛の亂について」(名大文學部論集11)

⑦ 十國春秋卷十一の杜荀鶴、殷文圭、楊夔、沈文昌の各傳、同卷十三の田頌傳等參照

⑧ 注④論文にひく資料參照。

⑨ 同書十一頁。

⑩ 同書五六五頁。

⑪ 旌表については、冊府元龜帝王部四卷百四十晉天福四年正月條注、及び小竹文夫「中國の門閥旌表について」(史潮45)

⑫ 以上の三つの資料の分析については仁井田陞氏「支那身分法史」「唐宋法律文書の研究」參照。

⑬ 德安志の原文は次のようである。

易云、家正則天下大定。是知治家之道、古猶病諸。故聖人垂五教、敦九族、使後之人倫勳而行之、自非聖人、不可庶幾乎。我家襲祕監之累功、承著作之貽訓、代尊孝弟、業繼典墳。緣是子孫衆多、上下和睦、存沒十代、曾玄二百人、粗副孫謀、致其餘慶。我聖人誕敷孝治、恢振義風、錫以渥恩、表之閭巷、勃焉榮耀。幸異鄉民、得不以知足、宅心惡盈、是懼哉。崇所感者、殆恐將來昆雲漸衆、愚智不同、苟無敦睦之力、慮乖負荷之理。今設以局務、垂之以規程、推功任能、懲惡勸善、公私出納之式、男女婚嫁之儀、蠶事衣粧、貲財飲

食、必合均等、務要和同掌令、子子孫孫、無間言而守義範也。銀青光祿大夫檢校右散騎常侍守江州長史兼御史大夫上柱國賜紫金魚袋姪崇議定。

なお同治德安縣志卷三、地理志古蹟に、省志によつて胡旦の義門記をのせるが、内容はかなりうたがわしい。

⑭ 我家累世餘慶、子孫衆多、上下和睦。然恐雲仍漸夥、愚知不同、苟無肅睦之方、恐乖負和之理。今欲維之以局務、定之以規程、推功任能、勸善懲惡、使公私財用之費、冠婚良祭之等、衣食輿馬之給、子孫可以世守。何如。衆曰善。

⑮ この點と關係して、丹喬二「宋代の地主」「奴僕」關係」(東洋學報五三の三・四)參照。

⑯ 草野靖「宋代民田の佃作形態」(史艸10)にひく檢校關係の資料で、江南東西路のものが多いのは史料的理由もあるが注目すべきである。

⑰ 崇についてはほとんど全ての資料が、崇と恐らく諱で記しているのは、崇が有名で一般的な資料に諱でのせられるのにひかれたためかと思われる。ただ族譜だけは、伯宣の子を懼とするが、あるいは、この懼が崇の諱であつたかもしれない。

⑱ 史載、仁宗時、族衆地窄、乃遣官分散二百九十一莊居住。

⑲ 崇之後、有蒲圻令勛、德安令攻吉、王府司馬禮、江州司士參軍試奉禮郎資、洪州書記慕、知舞陽縣密、謂州推官賞、都知兵馬使珠、衙前兵馬使讓、感義軍都頭部、討擊副使輝、館驛副使謙、教練使淳、節度押衙二人珪儔、節度總管三人鏐溫鸞、舉進士九人遜徽度漸續誘永陞延年、舉三傳四人昭昱琛早、三史三禮各一人鄧用。

尙、全唐文八八八の徐鍇の陳氏書堂記によれば、勛、玫は崇の弟である。又同治德安縣志卷三、古蹟にひく胡旦の義門記参照。

②⑩ この手法は、ここでは若干の問題をもっている。それは、ここで輩字に考えられるものが、孝・徳・道・元・智、仕・上・子、伯の如く、何らかの一連の意味をもつようにみえ、同様の作業を道士についてしてみた時えられる、法、文、道、智、徳、孝、元、玄等の字とよく似ていることである。この点からいえば、ここに記されたものは道教の立場から與えられた名前には、その名の與え方が輩行にそっていたと推測できよう。

②① 唐初の勳官・散官については、宮崎市定「九品官人法」第五章参照。

②② 官人永業田については、唐令拾遺田令二十二の四参照。

②③ 騎都尉朱法倫は法字によって東武村にいられた。

②④ 冊府元龜四七六の元和元年正月の呂溫の上奏に、當時衡州で租稅負擔戸は八二五七戸であったが、調査の結果、所由が隠していた不輸稅戸一六七〇〇戸を摘發したというのも同様の例である。

②⑤ 以上のような動きと關連して、この時期、所由乃至郷役の數をへらしたという記事がこの地域に集中しているのは、今後解明を要する事實である。前記全唐文四七八の羅珣の德政碑、舊唐書二一李勣傳、樊川文集卷14・祭城隍神祈雨文（黃州）第二文等。

②⑥ 加藤繁「宋代の主客戸統計」（史學十二の三・のち支那經濟

史考證下所收）、柳田節子「宋代の客戸」（史學雜誌68の4）
②⑦ 荒木敏一・米田賢次郎編「資治通鑑胡注地名索引」附録の宋代疆域圖を底圖として使用させていた。

②⑧ 柳田節子「宋代土地所有制にみられる二つの型——先進と邊境」（東洋文化研究所紀要第二九分冊）、周藤吉之「宋代四川の佃戸制——最近の研究をよんで——」（唐宋社會經濟史研究）

「北宋四川の佃戸制再論」（宋代史研究）。拙稿「宋代四川夔州路の民族問題と土地所有問題」（史林50の6・51の1）

②⑨ この点については拙稿、一九六九年の歴史學界の回顧と展望——史學雜誌79の6参照。

③⑩ 十國春秋卷七劉信傳に「全播の守卒は、皆農夫たり」云々とある前後。又同書卷二〇。

③⑪ 九國志卷二、危全諷傳。同卷一馬珣傳。資治通鑑卷二六七開平三年六月條。十國春秋卷二天祐六年三月條。

③⑫ 長編卷二十二、太平興國六年十二月條及び同治安福縣志卷十二、人物、義行、の項の南唐の劉德言の記事を参照。

③⑬ 江南僞命日と克復後者とに分けて、その處置を詔として命令しているのであって、江南僞命日にはこうであったという懷古的いい方ではない。

③⑭ 馬氏南唐書卷三嗣主書、陸氏南唐書卷二、十國春秋卷一六、天下郡國利病書卷十。

③⑮ 時期的には烈祖の時であり、この方が前。

③⑯ 長編卷十四開寶六年九月、湘山野錄中、中村氏前掲稿（注③）はこの他多くの記事の異同を校訂している。

③⑰ 長編注⑭の部分につづく。又十國春秋卷十二。

③⑧ また長編卷九開寶元年十一月條。

③⑨ 十國春秋卷二七。

④② 注④論文の第四章參照。

④① また十國春秋卷三十部廷謂傳の郷兵を參照。

④③ この點については拙稿「唐宋期における郷村制度の變革過程」(民科・新しい歴史學のために一〇四)參照。

④④ 唐宋の水利工事については、今まであげた資料の他にも、同治臨川縣志卷五水利臨川縣の千金陂記が興味のある資料である。又、斯波義信「宋代明州の都市化と地域開發」(待兼山論叢三)は、明州の實質的開發が唐中期にはじまり、その推進者が唐朝の地方官であったことにふれている。因みに明州は兩浙では最も客戶率の高い地方である。

④⑤ この詔をめぐる文獻はあまりにも多いが、とりあえず、柳田節子「最近の中國における宋代土地制度研究——華山『關於宋代客戶問題』を中心として——」(東洋文化37)と宮崎市定「部曲から佃戸へ——唐宋間社會變革の一面——」(東洋史研究二九の四・三十の一)をあけておく。只この詔でも、それ以前には、主人の憑由をえてはじめて移轉できなし、それすらもなかなか實行されなかったといっているのには、充分に注意する必要がある。

④⑥ 主戸客戶の問題についても論文はあまりにも多い。とりあえず、柳田節子「郷村制の展開」(岩波講座世界歴史9)、島居一康「宋代の佃戸と主客戶制」(東洋史研究30の4)、拙稿「宋代の地主・佃戸・佃僕の研究について」(岡山史學25)參照。

東洋史研究叢刊之二十五

山西商人の研究

寺田 隆信著

A5版 本文四一三頁 索引一〇頁
定 價 四、五〇〇圓

本書は明代十四〜十七世紀における、商人および商業資本の成立過程、あるいは、その存在形態を論じたものであるが、考察の對象として、所謂「山西商人」を取り扱っている。ただし、題名には、より一般的な「山西商人」を使用しているが、實態としては、山西商人と、その隣省である陝西出身の商人とを含み、普通、山陝商人とか西商とかよばれるものと一致する。

右書御希望の方は本會まで御申込み下さい。

京都市左京區吉田本町 京都大學文學部内
東 洋 史 研 究 會
振替 京都 三七二八番